

琉球大学学術リポジトリ

鈴木孝雄の実践における低学年の総合的な学習についての考察—実践記録『一年生の四季』の特長と生活科との関連についての分析を中心に—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-15 キーワード (Ja): 学級文化活動, 教科外活動, 生活科 キーワード (En): 作成者: 白尾, 裕志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019835

【実践研究】

鈴木孝雄の実践における低学年の総合的な学習についての考察 —実践記録『一年生の四季』の特長と生活科との関連についての分析を中心に—

白尾 裕志¹

A Study of Integrated Learning on Education Practice in the Lower Elementary School by Takao Suzuki —Focused on the Analysis of Relationship Between the Feature of Practice Recording “Four Seasons in First Grade” and Living Environment Studies—

SHIRAO Hiroshi¹

要 約

1960年代から1970年代にかけて、東京都の公立小学校教諭として活躍した鈴木孝雄の教育実践『一年生の四季』に焦点をあて、その分析を通して教育実践の特長を明らかにした。『一年生の四季』における教育実践は、1960年代の後半から1970年代の前半に取り組まれたものであり、その内容は生活科の先駆的な実践でもある。本論では、鈴木の実践の特長について、教育内容に加えて教育方法の観点から分析、検討を進め、その特長として、個別指導を起点としたグループ指導に加えて、表現活動を重視した教育実践の舞台として家庭や地域が明確に位置付けられていたことを示した。

また、生活科との関連からは、生活科の教育内容としての遊びや動植物の観察や飼育等の「もの」や「こと」に対して、それら自体と自分自身への気付きに止まらず、それらと他者(友達・保護者・地域の人々等)との人間関係を含めた中で認識し、表現していく学習活動によって、鈴木の実践の継承が可能であることを示した。

キーワード：学級文化活動，教科外活動，生活科

1. 問題と目的

鈴木孝雄(1932-1978)は、東京都の公立小学校教師であり、主な著書として『学級文化活動と集団づくり 学級新聞“ブタとアヒル”の物語』(1967)(以下、『学級文化活動と集団づくり』)や『一年生の四季—その生活と学習—』(1977)(以下、『一年生の四季』)がある。日本生活教育連盟(以下、日生連)の会員でもあり、雑誌『生活教育』を中心に論考を残している¹⁾。

鈴木の実践は、まず、子どもの生活が遊びと労働と学習から成り立っている(鈴木 1977: 6)ととらえ、その舞台を学校、家庭、地域に求め、そこに子どもと教師と親たちが一緒になってつくりあげるところに特長がある。

この特長は、『学級文化活動と集団づくり』にも『一年生の四季』にも貫かれており、子どもが教育活動や取組等を通して、個としても集団としても成長していく姿が描かれている。

本稿は、1960年代の終わりから1970年代に鈴木が取り組んだ低学年の実践をまとめた『一年生の四季』に注目して、その教育的な意義を低学年の総合的な学習として実践をとらえ直し、また、1989年に新設された生活科との関わりから、現代における再現性を検討することを目的としている。

¹ 琉球大学大学院教育学研究科教職実践講座 shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp

2. 「遊びと労働の教育」私の年間プラン(1974年)の検討

『一年生の四季』の出版に先立って鈴木は、1974年4月に前任の板橋区立志村第六小学校から板橋区立大山小学校へ異動した6月に、「遊びと労働の教育」私の年間プラン(表1)を発表している(鈴木1974)。

その冒頭で、「実生活と教育との結合という観点」で実践を進め、『学級文化活動と集団づくり』で著した「ブタとアヒル」と呼ばれる高学年の子どもたちととりくんだ実践を、低学年でどう生かし、発展させるかが私の課題となったことを示している(鈴木1974:4)。

また、『学級文化活動と集団づくり』からの継続的な実践研究の関心事として「子どもの現実を見つめ、地域破壊の中で進行している子どもの家庭の現状を理解しようと努める過程で子どもたちの生活に今、いちばん欠けているものは何か」を探ることをあげ、鈴木は「子どもらに回復させるべき生活で、最も必要なもの、それが、遊びと労働である」とまとめている(鈴木1974:4)。

表1 「遊びと労働の教育」私の年間プラン (『生活教育』, 1974年6月号, pp.6-7から転記)

“遊びと労働の教育” 私の年間プラン				志村6小 スズキ タカオ		
月	あそび	行事	文化的実践活動	労働		社会科教育
				動物	植物	
4	めんこ		木のぼり 誕生会	えんぴつ(ナイフ) 工作台(のこぎり) 紙(ナイフ)	うずら <やぎ>	赤かぶ、20日大根 ○学校で働いている人々(小単元) △おおきなかぶ △きかんしゃやえもん
5	ちゃんばら	このぼり(学年) 魚とりえんそく (学年)	虫とり	紙の刀とかぶと (大はさみ) 誕生会のかんむり	あひる こやし (ふん・雑草)	なす きゅうり トマト ○学校のゆきかえり ○友だちの家をたずねて
6		めんこ大会(学級)	山や川をつくる	ダンボールの汽車 (はさみ・のこぎり・ナイフ・きり)	ちゃぼ	さつまいも ○おうちの人々
7		たなばた(児童会)	絵日記 <紙しばい・新聞> おてつだい	竹がえし (ナイフ・のこぎり) 飼育箱 (のこぎり・とんかち・きり)	うさぎ	○おかあさんのシゴト △七夕
8		キャンプ(地域)				▶おてつだい
9	ビー玉		洗たく (靴下・ハンカチ)	カナカナ (ナイフ・のこぎり・とんかち)		○ぼくのシゴト ○おとうさんのシゴト ○カナダ、アメリカ
10		運動会(学校)		木の刀 (ナイフ・のこぎり・やすり) 箱ぐるま (ナイフ・のこぎり・とんかち)	小松菜 大根	△かきむかし △ちからたろう ○ニュース
11	こま	ビー玉大会 学芸会(学校)	紙しばい	竹てっぽう (ナイフ・のこぎり・きり)		□みんなであるこう(赤塚) △ちいさいおうち △とらつく、とらつく、とらつく
12	お手玉	もちつき大会	新聞			○じょうぶなからだ △かさじぞう
1	竹うま			竹うま (のこぎり・ナイフ・ベンチ) 糸巻まき(のこぎり・きり・ナイフ・ドリル)		○おこづかいとお年玉 ○中国、たいわん、ベトナム △ゆきの日
2	たこ	親子スキー(地域)		ひこいちだこ(ナイフ・はさみ・やすり)		○100円もってかきもの △三年ねたろう
3		竹うま運動会				○ぼくらの町を絵地図に △かみすき村

(注) △=読みもの教材

「遊びと労働の教育」私の年間プランには、「遊びと労働の教育」のための教育内容が示されている。その特長は、教育内容の観点となっている「遊び」、「行事」、「文化的実践活動」、「手づくりの諸活動」、「労働」、「社会科教育」を関連のあるものとして示し、これら教育内容の観点を横断的に示していることがあげられる。また「遊び」、「文化的実践活動」、「手づくりの諸活動」、「労働」については、「簡単なものから複雑なものへ」(鈴木1974:8)徐々に手がかかるように配列されている。

「遊び」は「二ヶ月は継続しなければ集団づくりの上でも成果が期待できない」として継続的な取組として位置付け、「学級の全員にとりくませることが大切である」としている。さらに、「遊びの教育力」として、「手足の技術訓練を必然的にひきだす」、「集団をつくり、社会性、自主性を培う」、「創造性を身

につける」,「自然科学の原理を体で知る」の4つを指摘している。

「文化的実践活動」については、「一年間かかって展開していく活動の基礎づくり」と位置付け,「木のぼり」,「虫とり」と続く活動によって,放課後の外遊びにつなげ,後の班活動につながる集団づくりの最初の手立てとしてグルーピングを必ず取り入れている。また,学級文化活動として欠かせない三つのものとして,「誕生会」,「紙しばいづくり」,「新聞製作」をあげている。

「手づくりの諸活動」も,「簡単なものから複雑なものへと子どもの手の発達を考えて配列」されている。この活動では,お手玉や竹馬,凧などの手づくりの遊び道具を作るため,「遊びと手づくりの活動とは密接に結びついている」(鈴木 1974: 8)として,「遊び」と「手づくりの諸活動」が相互に,次の実践への必然性をつくり出す関係になっている。

「労働」は「動物と植物を対象とした労働教育」(鈴木 1974: 12)として位置付けられおり,生き物を飼育,栽培することによる責任と協力や団結を考えながら,「モラルを様々な事件をとおして体で身につけさせることができる」(鈴木 1974: 13)としている。

「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」に関して,田村(1993: 20)は次のように指摘している。

子どもが夢中になって打ち込むというような鈴木の実験に裏づけられた見通しを伴ったものだった。「年間プラン」にも見られるように,遊びの規模や機能をふまえて,それらの順序性が考慮されてもいる。

また,新井(2001: 47-8)は次のように指摘している。

鈴木は,このプランを自らの実践の経験から導き出した。したがって,季節に応じた活動の配列や学校・地域の行事が,相互に関連づけられており,「遊び」と「労働」という活動領域で,学校教育に全体としての子どもの生活を位置づけようとしていることがわかる。

そこには,遊びを実践の基礎に置いて,子どもの意欲を育て,学習への入り口とし,行事や文化的実践活動によって家庭や学級の人間関係を豊かにし,手づくりの諸活動や労働で,モノや自然に直接触れるという構造をみることができる。単発的,断片的なお仕着せの活動ではなく,子どもの興味を出発点に,長期にわたる取り組みと各種の行事が有機的に結びついているのである。

「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」は,新井が指摘するように「学校教育に全体としての子どもの生活を位置づけようとしている」優れた教育計画である。また,鈴木実践が秀逸なのは,「子どもの興味を出発点に,長期にわたる取り組みと各種の行事が有機的に結びついている」その指導性であり,『学級文化活動と集団づくり』から継続されたその趣旨は,「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」(『生活教育』,1974年6月号)の本文に具体的に示され,後の『一年生の四季』にも示されている。

筆者が『一年生の四季』を分析するために,「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」を基に指導性の観点から検討し,整理したものが,表2『一年生の四季』における「遊びと労働の教育」である。

3.『一年生の四季』における鈴木実践の特長

(1)『一年生の四季』に示された実践の取組

『一年生の四季』は,通算12年間の低学年の担任としての実践をまとめ,春から冬までの構成で著されている。以下に,「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」に準じた様式で取組をまとめた。

表2 『一年生の四季』における「遊びと労働の教育」

月	あそび	行事	文化的実践活動	手づくりの諸活動	労働		学校・学習・放課後・家庭
					動物	動植物	
4	メンコ/木登り	入学式/給食 誕生日会 ※誕生日会は親を招待。誕生日会の成功に向けた協力関係	あだな/桜吹雪/学級の愛唱歌 ちびっこ先生・コンクール：メンコ・鉛筆削り/読み聞かせ	えんぴつ(ナイフ)	小鳥/ウサギ		学年便り・学級便り：学級通信/親とのメンコ/トラブル解決：話し合い/工夫とルール作り/競争/保護者との連絡ノート(生活ノート)/偏食指導
5	虫取り	家庭訪問 誕生日会		餌刻み/	毛虫/アヒル/ドジョウ/ザリガニ/オタマジャクシ/カエル		毛虫のことでわかったこと。/文字・漢字の使用/行事や遊びからの係活動化/班長立候補制/アヒルの家庭への貸し出し
6		泊まりっこ 誕生日会	動物の卵 絵日記指導開始	竹の箸作り 給食で使用	トカゲ/カメ/イモリ/モルモット		孟宗竹を五感で感じる
7		誕生日会	絵日記/本読み・読み聞かせ		ハムスター		社会科「はたらくお父さん・お母さん」 手伝いから仕事へ
8							
9		誕生日会					
10	けん玉/弓/こま	運動会 誕生日会		けん玉/弓/こま/手打ちうどん/かんぼっくり(かん下駄)			
11	かんぼっくり(かん下駄)	新聞づくりの指導 「ひとり新聞」 誕生日会	絵日記から日記・ひとり新聞				日記から「ひとり新聞」
12	カルタ	誕生日会 餅つき大会 大福餅づくり	カルタ作り：読み札・絵札	餅つき/大福作り			テレビ視聴の時間制限の呼びかけ/ 親子共同の餅つき大会・大福餅づくりでの仕事分担
1	竹馬	カルタとり大会 「家族新聞」 誕生日会		竹馬/			「家族新聞」
2	凧あげ	「班新聞」 「学級新聞」 凧作り・凧あげ 誕生日会		凧/			「班新聞」から「学級新聞」へ(班毎に発行日を曜日割)
3	竹馬	竹馬運動会 誕生日会			カメの冬眠明け		

◎学級行事への参加を通して結びつく教師・子ども・保護者

◎技術の向上の見える化・競争・進級制度 ↓ 集団で競い合い・励まし合う(協同)

◎学習・係活動・放課後の遊びを通して結びつく子どもたち

◎小動物の世話から班活動・生命の尊さ・手と頭を使うことの大切さ

放課後のグループ化：遊び・虫取り・アヒルやウサギ等の世話・誕生日会の準備・グループ学習

(2) 『一年生の四季』における鈴木氏の指導性

① 表2 『一年生の四季』における「遊びと労働の教育」の特長

鈴木氏は、先述した「ブタとアヒル」と呼ばれる高学年の子どもたちととりくんだ実践を、低学年でどう生かし、発展させるか」という課題を基に、「子どもたちに回復させるべき生活」として「遊び」と「労働」を掲げて、低学年での実践に取り組んだ。

表2『一年生の四季』における「遊びと労働の教育」からは、鈴木氏が「子どもたちに回復させるべき生活で、最も必要なもの」として「遊びと労働」に対して、学級文化活動を中心とした取組と班活動を中心とする集団づくりの過程で、子ども一人ひとりが活躍する場をつくりながら、保護者との連絡帳(生活ノート)でのやり取りと行事を通して保護者との協力を組織しながら実践されたことがわかる。

以下、鈴木氏実践の特長を個別の取組から検討する。

1)「餅つき大会」と「大福餅づくり」

表2の行事に示した「餅つき大会」と「大福餅づくり」は、『一年生の四季』の「あんこ丸めて、大福もち作った」(鈴木 1977: 172-183)にまとめられている。

12月24日に第1学年(4学級)全体で取り組んだ「餅つき大会」と「大福餅づくり」である。保護者も加わり、朝から始め、給食の代わりに大福餅を食べて下校する流れとなっていた。子どもが主体となるように、事前の「子どもたちのジゴト」として、子ども自身の手やリヤカーを使って、地域の建設業者の協力も得ながら燃料の薪を集めて回ることになっていた。また、当日の「子どもたちのジゴト」として、子ども用の杵も準備され、ついた餅を親が細かくちぎって、それを子どもが広げてあんを入れることが決められていた。さらに1人5個の大福餅の内1個は、好きな形に作ってコンクールも行われた。この「餅つき大会」と「大福餅づくり」の全ての過程に子どもと保護者と教師が関わっており、「親子の共同作業は、わが子を見つめ、他の子を知るチャンス」(鈴木 1977: 183)として位置づけられていた。

2) 凧作り・凧あげ

表2の行事に示した「凧作り・凧あげ」は、『一年生の四季』の「たこたこあがれ、天まであがれ」(鈴木 1977: 208-220)にまとめられている。

2月に第1学年(4学級)全体で取り組んだ「凧作り」も親子共同作業である。1年生の子どもたちは、4月の入学式の直後から「肥後守」(ナイフ)を渡され、鉛筆削りから始まり、給食で使う箸作りや図工での使用、小動物の餌刻みによって、ナイフの使い方に慣れてきて、技術も上がってきた段階で、竹ひごからの凧作りに挑んだ。必要な長さを測り(算数「長さ」の応用)、竹ひごのバランスや凧の重心の確認(理科「重さ」の学習で使う「やじろべー」の応用)を、一人ひとりの子どもが活用しながら作成し、親子で凧を仕上げ持ち帰り、後日、家族も参加する凧揚げ大会をしたことが記されている。親子共同作業を通して、凧作りという課題の解決過程で、自然に教科の成果を踏まえながら活動に取り組めるようにしている。

3) 絵日記・日記・新聞づくり

表2の行事に示した「ひとり新聞」から「学級新聞」は、『一年生の四季』の「新聞作って、みんなのねがいを」(鈴木 1977: 143-154)にまとめられている。

鈴木は6月から始めた絵日記の指導を11月中に日記の指導へ替え、それと並行して「ひとり新聞」の指導を始めた。「ひとり新聞」は、日記を基に画用紙を縦長に使い、上半分に題と絵をかき、下半分に文章を書き直すものであり、「絵日記を発展させたもの」(鈴木 1977: 147)として指導された。鈴木は絵の部分がかットに代わり、文章を限られた字数に収めることも企図しており、絵日記、日記から発展した子ども一人ひとりの表現力を育てようとしていた。

1月以降は、「ひとり新聞」に家族も加わってもらうようにして「家族新聞」としていった。2月に入ると、グループで作る新聞を2人組から始め、3人組と拡大して、その後、班としての「班新聞」につながるように指導している。モルモットを飼育している班の新聞は「モルモット」(新聞)となり、誕生会を担当する子どもたちは、「しんぶん・たんじょう会」となったことが示されている。こうして班の数だけ新聞が作られるようになり、日曜日を除いた曜日割にすることで日刊化した学級新聞「マメタ」につながったとしている。

鈴木の新報づくりの指導は、絵日記や日記の指導を基に個からグループ化する過程で表現することの技術の習得と楽しさを子どもに味合わせながら進められた。

② 鈴木 の 指導 性

1) 教育活動のつながりや関わりによる必然を保護者へ結びつける

「①」の三つの実践からは、鈴木が学級文化活動からつながる子どもの生活における「遊びと労働」について、学級での子ども一人ひとりや班での活動に加えて、行事を通じた保護者との交流を積極的に取り

入れていることがわかる。

鈴木は、子どもの生活が遊びと労働と学習から成り立っていることを前提に上記の実践を展開しており、鈴木の実践の教材であり学習内容でもある、こま、竹馬、お手玉、メンコ、凧等の遊びには、子どもを夢中にさせる魅力があり、工夫する面白さやみんなで遊ぶ楽しさがあることを鈴木は指摘している(鈴木 1977:211)。

1学期に取り組んだ木登りや毛虫の観察・飼育、メンコ遊び、箸作りは、遊びと労働の学習内容として準備され、それらを連絡帳(生活ノート)で保護者につないでいる。このことで保護者が学習内容に関わる必然性が生まれ、その後の学級での誕生会や学年での親子共同作業につながった。

これに関して、村田(1993:20)は次のように指摘している。

子どもが夢中で打ち込むことの裏には別の要因も隠されていたのである。ひとことでいえばそれは、打ち込んでいる遊びが、親と子どもとのかかわりを学校においても家庭においても必然的に創り出すということであった。

この過程は学校と家庭と地域が教育の舞台として位置付くことであり、それが行事を重ねる分だけ回数が増えていき、教師と子どもと保護者による教育活動が1年間の内に数サイクル展開する実践となっている。教育方法として、保護者との協同が及ぼす影響を教育活動に位置付けた教育実践といえる。

2)学級での競争と協同

表2にある、かんぼっくり、竹馬には進級制度があり、メンコ、凧、竹馬、かんぼっくり(2年生との対抗試合)等は大会が開かれ、鉛筆削りコンクールや大福餅造形コンクールが開かれた。また、絵日記から「ひとり新聞」への移行期には印刷が競争となった。さらに進級制度では班毎の協同(技術の伝達・習熟に向けた教え合い)と他班との競争が展開された。鈴木は個人、班、学級を単位とする競争と協同について、次のように記している(鈴木 1977:158)。

うまくなりたい、負けるものかという意欲がひき出されるには、遊びそのものが豊かな内容をもっていなくていなければなりませんし、集団で競いあい、励ましあうという仲間づくりをしてやらねばなりません。

班競争について鈴木は、『学級文化活動と集団づくり』で次のように記していた(鈴木 1967:236)。

集団主義教育の「核・班づくりの方式」から少なからず実践を学んだ。しかし実践を進める中で子どもたちの生活にギスギスしたものを感じ、豊かな創造力の生まれてこないことに不安を覚えて、どこに問題があるのだろうかとサークル(日本生活教育連盟生活指導東京部会)の仲間といっしょに考え始めた。その結果、集団の規律の点検を強調し、活動を学習運動の側面に限定しすぎたことが明らかにされ、集団の質的向上と文化的な成長をねらう多様な実践的活動内容を子どもたちに与えねばならぬことが確認された。

鈴木は集団主義教育の「核・班づくりの方式」に対する不安から「集団の質的向上と文化的な成長をねらう多様な実践的活動内容」として『学級文化活動と集団づくり』での実践をまとめた²⁾。

この意識は『一年生の四季』でも継承されており、集団づくりを集団の規律や点検、教科の学習からではなく、「遊び」を起点とした学級文化活動として『一年生の四季』での実践に取り組んだ。そこには、子どもの興味や関心、発達の要求に基づいた子どもの自主的で創造的な文化活動を通した集団づくりを進

めることが意図されている。鈴木が“みんながひとりのために”“ひとりがみんなのために”は、私の口ぐせになってしまったようです(鈴木 1977: 140)と記しているように、子ども一人ひとりを基盤にした指導と共に、競争と協同を取り入れた集団づくりを併用していた。

3) 個を育てる指導(「かく」(書く／描く)ための指導)

鈴木は、学級文化活動として欠かせない三つのものとして、「誕生会」、「紙しばいづくり」、「新聞製作」をあげている。

これらの活動の基盤となる技術が「かく技術」(書く・描く)である。絵日記は6月から始められ、11月いっぱいまで日記に替わり、日記が新聞(「ひとり新聞」→「家族新聞」→「班新聞」→「学級新聞」)へ発展的に指導された。

誕生会は「生命の尊さを知る場」として「誕生日に会をもつことを原則」(鈴木 1974: 11)に行われ、保護者に自分の子どもの成長過程を話してもらったり、手紙を書いてもらったりしている。学級の代表の子どもは、祝いの言葉を鈴木と誕生会委員によって数度に渡って書き直しを求められる。誕生会では誕生日を迎える子どもに対して学級として「集団が協力して内容を高める」ことが求められ、「子どもたちが日常的に実践している、合唱、演奏、紙しばい、作文、寸劇、新聞などが発表され」、それらを「発展させるべき教科外の諸活動が総合的に発表される場として位置づけ」られていた。

この過程では、誕生日を迎える子どもが尊重されることに加えて、誕生会で祝いの言葉を発表する子どもや誕生会委員の子どもが「かく技術」の指導を高めていく。

また、誕生会の出しものとしての「紙しばい」や「新聞」の指導について、鈴木は次のように記している(鈴木 1974: 12)。

まず、同好者のクラブとして組織されるまでに、個人、二～三人のグループ、班という筋道でとりくませる。つまり、全員に、何を取材し、どう書くのかの基本的技術を身につけさせることである。特に個人で作ることにうんと時間をかけることが大切だという。一人ひとりが確かな力をもたずして、集団で制作しても、優れたものはできない。

つぎは、書き描く力を国語と図工できちんと育てなくてはならぬことである。絵日記がその出発である。(中略)

紙芝居では、たとえば、“ぼくの先生”のテーマでかいた一枚の絵日記を二枚にふくらませ、さらに三枚つかってかくように指導して、物語性をつけることとコマわけのしかたをおぼえさせる。

新聞へ進めていくにも、一つの事実をかいた一枚に、二つの事実をかくように教え、それができたら、三つかきこむように指導する。絵日記における絵の部分を徐々に小さくしてカットに移行させていくわけである。

紙しばい、新聞のいずれも、子どもたちが“おもしろいもの”を創るということは、“かく力”とともに、そこから取材できる豊かな活動、多様な経験、生活の内容の拡大がなくてはならない(傍線筆者)。

こうした鈴木の指導性に関して新井(2001: 49)は次のように記している。

教師の指導性という点で言えば、鈴木は、取り組みの過程で子どもへの問題提起をし、時には厳しく叱るなど、教師としての指導力を発揮している。しかし、飼育活動が子どもの学級文化への多様な参加の糸口になっていたり、あるいは「毛虫はぼくらの友だちだ」の取り組みでもその後の観察や発見が子どもに任せられていたりすることからわかるように、鈴木の教育観・指導観は、教師が準備した筋道を子どもに通らせ、あるいは教育的な価値や内容を子どもに伝達すると

いうものではない。当時も現在も、決して教師は一方的に子どもや親を組織し、指導する存在ではありえない。鈴木実践の白眉は、学校を子どもらしい体験ができる場所にしようとした出発点と、国民が獲得していくべき民主的な学級集団づくりや科学的な社会認識の獲得という目標とが、子ども文化の創造と労働を介して密接に結びついている点である。そこには、人間に対する絶対的な信頼感と未来への期待があるといえよう。

新井が鈴木実践の特長を「学校を子どもらしい体験ができる場所にしようとした出発点と、国民が獲得していくべき民主的な学級集団づくりや科学的な社会認識の獲得という目標とが、子ども文化の創造と労働を介して密接に結びついている点である」とまとめているように、鈴木の実践には明確な目標(国民が獲得していくべき民主的な学級集団づくりや科学的な社会認識の獲得)がある。加えて、その取組において、教師と子どもを中心とした学級での取組の連続として、保護者を教育実践の舞台に登場させる機会を意図的、計画的に組み込んで、相互の関係によって教育効果を高める教育実践となっている³⁾。

また、その過程では、学級集団づくりにおいて、一斉指導と個別指導を組み合わせ、「個人で作ること」にうんと時間をかけることを重視して、段階的なグループ化、保護者も参加する行事に合わせた組織化を図っている。こうした子どもの表現活動が日常の教科指導と関連付けられ、誕生会や新聞づくりなどの教科外活動として位置づけられた指導となっている。

4. 低学年の総合的な学習として鈴木実践

(1)生活科の成立と教育内容

「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」(表1)について、新井が「右の『社会科教育』の単元を、『生活科』のものに置き換えれば、今日でも十分通用する豊富な内容が配列されているといえよう」(新井 2001:47)と評しているように、「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」の教育内容は、遊びや動植物の観察や飼育、家族や地域の人々との関わりを教育内容に含んだ1989年以降の生活科との関連が認められる指導計画である。

1989年に新設された生活科は、1950年代の後半に始まる低学年社会科に関する議論等⁴⁾や1967年の教育課程審議会答申で、低学年の理科と社会に関して具体性や子どもの経験に加え、他教科等との関連による効果的な指導が求められたこと⁵⁾が背景あり、低学年の発達も視野に入れながらも、その中心は教科の改変を含めた教育内容の検討から始まった。

『小学校学習指導要領』(文部省 1977)では「低学年においては、合科的な指導が十分できるようにすること」が求められ、その後、低学年の社会科と理科の統廃合を含めた議論を経て、低学年の社会科と理科を廃止して、生活科の目標である「自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせる」(文部省 1989:69)ことを重視して、低学年の発達段階を踏まえ、「低学年教育全体の充実を図る」(教育課程審議会 1987:67)ための位置付けがされた新教科としての生活科が新設された。

「低学年教育全体の充実」の観点となったのが、「国語や算数などにかかわる基礎的な学力と生活や学習の基礎的な能力や態度などの育成を重視し、低学年の児童の心身の発達状況に即した学習指導が展開できるようにする観点」(教育課程審議会 1987:67)である。

この観点に従って生活科の教育内容には、1989年の新設当初から、身近な人々との関わりが目標と内容に位置付けられており、教育内容として遊びや動植物の観察や飼育、家族や地域の人々との関わり等が含まれていた。同様の教育内容を備えた「“遊びと労働の教育”私の年間プラン」(表1)を参考にした生活科の実践は可能であることがわかる。

(2) 生活科の充実・発展と鈴木実践から学ぶもの(結びにかえて)

1) 現在の『小学校学習指導要領』との関わりから

2017年の『小学校学習指導要領』における生活科の「第1学年及び第2学年」の目標は次のように示された。

- (1) 学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。
- (3) 自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようにする。

先述した『『一年生の四季』における「遊びと労働の教育」の特長」での三つの実践は、この目標につながるものとなっている。例えば、「凧作り・凧あげ」や「絵日記・日記・新聞づくり」では、生活での自分と家族の関わりから楽しみ、気付いたことを表現して、「自分たちの遊びや生活をよりよくする」ことにつながっている。

また、『小学校学習指導要領』の「指導計画の作成内容の取扱い」の配慮事項にある、「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法により表現し、考えることができるようにすること。また、このように表現し、考えることを通して、気付きを確かなものとしたり、気付いたことを関連付けたりすることができるよう工夫すること」については、鈴木実践での絵日記、日記、紙芝居、新聞等を学級活動と絡めて実践することが可能である。

さらに配慮事項の「具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えることができるようにするため、見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫するなどの多様な学習活動を行うようにすること」も様々な遊びや表現活動につながり、「具体的な活動や体験を行うに当たっては、身近な幼児や高齢者、障害のある児童生徒などの多様な人々と触れ合うことができるようにすること」も学級での行事として、取り組むことで多様な実践が可能である。

鈴木実践を参考にして、低学年の子どもが「主体的・対話的で深い学び」を学習の自然な筋道で展開していくために必要なことは、鈴木実践の特長である様々な行事を通じた表現活動としての取組を保護者や地域の人々との協同の場として共有していくことである。子どもの興味の喚起と自由に楽しく活動に取り組むことで、子どもに「主体的・対話的で深い学び」に結び付けることが可能である。

最後に、鈴木自身が『一年生の四季』の「あとがき」に「子どもを育てるには、教室内だけでなく、学校の外、つまり家庭や地域においても、子どもをきちんとつかんでいくことの大切さを、今更のように考えさせられました」と記しているように、子どもの発達に必要な教育内容だけではなく、教育実践の舞台として家庭や地域が明確に位置付けられていたことが、鈴木の実践に大きな効果をもたらした。

2) 生活科での「つながり」の重視と鈴木実践の継承

図1に示すように森脇(2012)は、「学びの協同化」について、その学習形態を関係論的な観点でとらえ、その質的な把握として、不即不離の関係にある「存在論的なつながり」と「認識論的なつながり」があることを指摘している⁶⁾。これは、学級での授業を想定したものであるが、鈴木実践の場合、「人間

が人間として生きていくために必要なつながり」(森脇 2013：231)としての「存在論的つながり」の中に、保護者がかなりの頻度で位置付けられた実践である。学級での子ども一人ひとりと集団による授業の外に保護者を交えた行事等によって、子どもの学習内容が豊かになっていくように組織された実践といえる。そこには、子どもと教師、保護者との多様な活動や対話が存在しており、子どもは、個や小集団の活動を基にした他者との関わり・つながりを通じた学習活動によって、認識を深めていく「認識論的つながり」が働いている。

生活科の教育内容としての遊びや動植物の観察や飼育等の「もの」や「こと」に対して、それら自体と自分自身への気付きに止まらず、それらと他者(友達・保護者・地域の人々等)との人間関係を含めた中で、「つながり」として認識し、表現していく学習活動によって、鈴木が示した先駆的な教育実践の成果を継承していくことにつながる。

〔注〕

- 1) 鈴木孝雄, 1963, 「小学校一年生の学級づくりの実践」『生活教育』誠文堂新光社, 4月号:54-59.
 鈴木孝雄, 1965, 「班学習のなかで」『生活教育』誠文堂新光社, 6月号:49-54.
 鈴木孝雄, 1966, 「五年たった」『生活教育』誠文堂新光社, 3月号:44-47.
 鈴木孝雄, 1966, 「なぜ子どもの文化活動にとりくむのか」『生活教育』誠文堂新光社, 4月号:40-47.
 鈴木孝雄, 1969, 「学級文化活動と集団づくり—『豚とアヒル』の学級の自己分析」明治図書『生活教育』, 10月号:73-80.
 鈴木孝雄, 1970, 「どろんこ学級の子どもたちと父母たち」『生活教育』明治図書, 7月号:15-20.
 鈴木孝雄, 1971, 「父母と手を結んだどろんこ学級の夏休み」『生活教育』明治図書, 7月号:45-51.
 鈴木孝雄, 1973, 「子どもの生活—子どもの学級」『生活教育』日本標準, 4月号:26-33.
 鈴木孝雄, 1975, 「一年生の四季“春の巻”」『生活教育』日本標準, 4月号:13-18.
 鈴木孝雄, 1975, 「板橋青空学校の実践から」『生活教育』日本標準, 9月号:40-47.
 鈴木孝雄, 1975, 「学級通信と集団づくり」『生活教育』日本標準, 10月号:18-19.
- 2) 鈴木が「実践を進める中で子どもたちの生活にギスギスしたものを感じ、豊かな創造力の生まれてこない」と感じた実践は、上記〔注〕の「小学校一年生の学級づくりの実践」、「班学習のなかで」の初期の実践報告に示されており、そこでは学級や班の規律、学習での班競争が記され、班ごとの劇等、の学級文化活動としての取組はあるものの、学級文化活動を介した集団づくりの観点は確認できない。
- 3) 鈴木の実践の特長を新井は「子どもの興味に出発して、そこから学習を深め、人間関係を広げていく」と指摘している。
 新井孝喜, 1995, 「子どもの生活を育てる学級文化活動—鈴木孝雄実践に生活科の原点を探る—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』: 235
- 4) 倉沢剛, 1956, 「教育課程の当面する課題—小学校」『文部時報』, 947:6.
 「低学年においては社会科と理科を統合して生活科というようなものにし、音楽と図工と体育を

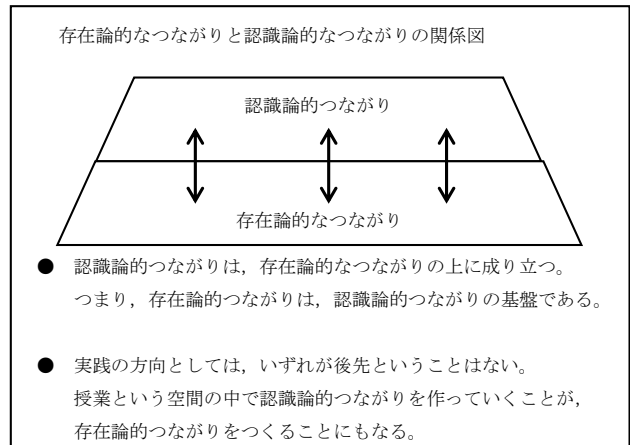


図1 存在論的つながりと認識論的つながりの関係図 (森脇 2013:231 より転記)

統合して表現科というようなものに改め、総合教育の実をあげたいという要求は傾聴に値するようと思われる。一挙にこのような統合はむずかしいかもしれないが、低学年の指導に総合性を留意しようとする点は何としても取り上げるべきであろう。」

その他に、金沢嘉一・桑原正雄・矢川徳光、「問題提起 社会科は小学校低学年で必要か」教育科学研究会国土社『教育』、1957年2月。上田薫、「低学年の社会科について」誠文堂新社『カリキュラム』、1957年5月。長妻克亘・重松鷹泰・鈴木喜代春・大槻健、「低学年社会科をめぐる」(誌上シンポジウム)『現代教育科学』明治図書、1961年9月などがある。

- 5) 教育課程審議会 第22回答申, 1967, 『新教育学大辞典』第7巻, 1990: 258-260
- 6) 森脇健夫, 2013, 『学びの協同化』の観点から見る戦後社会科実践史—鈴木正気, 安井俊夫, 加藤公明実践の関係論的分析—『戦後日本の教育実践—戦後教育史像の再構築をめざして—』三恵社: 231.

〔引用文献〕

- 新井孝喜, 1995, 「子どもの生活を育てる学級文化活動—鈴木孝雄実践に生活科の原点を探る—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』: 231-241.
- 新井孝喜, 2001, 『小・中学校における「総合的学習」地域教材の開発と試行』平成11～12年度 文部省科学研究費補助金 奨励研究(A) 研究成果報告書(課題番号11780117).
- 教育課程審議会, 1987, 「幼稚園, 小学校, 中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について(審議のまとめ)」文部省小学校課・幼稚園課編集, 『初等教育資料』509: 67.
- 文部省, 1989, 『小学校学習指導領』大蔵省印刷局.
- 森脇健夫, 2012, 「「存在論的なつながり」と「認識論的なつながり」, 奈良女子大学附属小学校学習研究会編『学習研究』456.
- 森脇健夫, 2013, 『学びの協同化』の観点から見る戦後社会科実践史—鈴木正気, 安井俊夫, 加藤公明実践の関係論的分析—『戦後日本の教育実践—戦後教育史像の再構築をめざして—』三恵社.
- 鈴木孝雄, 1967, 『学級文化活動と集団づくり 学級新聞“ブタとアヒル”の物語』明治図書.
- 鈴木孝雄, 1974, 「遊びと労働の教育—私の年間プラン」『生活教育』日本標準, 6月号: 4-13.
- 鈴木孝雄, 1977, 『一年生の四季 —その生活と学習—』草土文化.
- 田村真広, 1993, 「子どもの生活に根ざす生活科 先駆的实践から学ぶ」『講座 教科教育 生活科教育—生活教育からのアプローチ』学文社.

